

入選

消えた水

青森県 むつ市立脇野沢中学校

三年 坂田美咲

この春、私の通う中学校に新しく国語の先生が赴任してきた。この先生、最初の授業で自己紹介を簡単に済まされたあと、いきなり私たちに『「さんずい」のつく字を思いっただけ書いてみなさい。』と課題を提示した。言われるがままに私は、ノートに思いっただけ字を片っ端から書きつづった。海、池、沼、河、泳、浜、満、渡、源：・濁、汚、涙、泣、消。

おそらく先生の意図することにはまった形だが、私たちの生活は、水に関連していることが多いということに気づかされた。

もしも、この水がなくなってしまうたら：：どうなるのだろうか。それを考えさせられることが、実際私の住むこの脇野沢地区で起こった。

二〇〇六年十一月のことである。脇野沢の本村地区の簡易水道で「濁り水」が発生し、水を安心して使えない事態となった。

なぜこのようなことが起こったのか。後々わかったことだが、何かの工事をしていて最中に誤って水道管を破裂させてしまったらしい。この事故は、単なる事故ではとどまらなかった。実は同じ年の五月に黒石市で同様の事故が発生していた。にもかかわらず、その教訓が生かされず、当時の水質悪化の危機管理の体制の不備が露呈したのである。住民には防災無線で周知を図ったものの、青森県や報道機関等への広報が行われずマヒしてしまい、そのため住民からの苦情が殺到し、脇野沢本村地区は大混乱に陥った。

やがて地区から水が消えた。人々の暮らしは一変した。不慣れた生活が余儀なくされた。給水車にはバケツを持った人たちの行列ができた。風呂、洗濯機、水洗トイレ：：は「無用の長物」と化した。

学校も打撃を受けた。給食センターでの調理ができなくなり、学校では給食の配給が止まり、「弁当」が配られた。この地区にとっては未曾有のできごととなった。

では、こうした事態に備え、水を守るにはどうしたらよいか。地方自治体

はきつちりとした水道危機管理マニュアルを定める。一方、私たち自身にもできることがある。例えば、日頃から水の無駄遣いをやめること。そして、非常事態に備えてペットボトル等の飲料水をあらかじめ確保しておくことである。簡単なようだが、これが意外とできていない。「水と安全はタダ」と言われたのはどうの昔のこと。これからは自分たちの手で水を守る時代に突入していると思う。

外国では「水」を求めて争いの絶えないところもあると言う。近い将来、日本もどうなるかわからない。今、問題となっている地球温暖化に加えて、森林の伐採や海、川へのごみ投棄等の自然破壊を悔い改めなければ、清らかな水はまちがいなく、「汚」れて「消」えてなくなる運命にあると言えるだろう。

そうなるからでは遅いのだ。今ならまだ水を救えるし、守れる。私たち人間の英知を集めて水を守らなければならぬ。それが私たちの暮らし、ひいては私たち自身を守ることもあるのだ。

入選

この流れをいつまでも

岩手県 軽米町立小軽米中学校

三年 梅木大幹

スクールバスの窓から川を眺めることが習慣になったのはいつ頃からだろう。僕は、雪解けの時期になると川の水量が気になって、ついつい川を眺めてしま

う。

「田んぼの水は足りるだろうか。」

今年も水量の少ない川を眺めながら思った。僕がこんなに川の水量を気にするようになったのは、ある出来事があったからだ。

僕が小学校五年生の夏休みのことだった。田んぼの管理を全て行っていた祖父が入院することになった。そのため、それまで祖父が行っていた仕事を家族で分担して行わなければならなくなった。父はあぜ道の草刈り、母と僕が田に水を入れる仕事、祖母が頃合いを見てその水を止める係だ。初めて仕事を任せられた緊張と、それまで元氣だった祖父が入院することのショックとで混乱したのを覚えている。

僕の家は兼業農家で、小さな田と畑がある。今はきちんと整備された田だが、六十年ほど前は石ころだらけだった原野を、曾祖父が長い年月をかけて手作業で開墾したのだそうだ。小さいながらも、家族五人の一年分の米をまかなう大切な田だ。その米作りに欠かせない水の管理が僕の仕事になったのだ。

毎朝五時に起きて片道一キロの道のりを歩いて田に向かった。田のすぐそばを川が流れているので、水には困らないだろうと僕は簡単に考えていた。ところが、川を見て愕然とした。五メートルほどの川幅にはほんの少ししか水が流れていないのだ。とても川とは言えない水の中程に水中ポンプが設置されており、電源を入れると勢いよく田に水が流れ込んだ。その勢いは、わずかばかりの川の水を全て吸い上げてしまうかのようだった。

僕は急いで家に戻り、このことを祖母に話した。すると、祖母は悲しそうな表情をしながら言った。

「最近冬に雪がたくさん降らなくなったから、川の水も少なくなったんだよ。これも地球温暖化が関係しているのかねえ。」

さらに、こんなことも話してくれた。

祖母が幼かった頃は、川から取水路を引いていた。川の水が少なくなれば、取水路に流れ込む水が少なくなる。すると、自分の家の田に水を引き込むために、夜中に他の家の取水路にふたをすするという自分勝手な行為があちこちで起こり、争いになった。この争いは「水戦争」と呼ばれ、とても恐ろしい思い出として祖母の心に今も残っていると。

今から五十年以上も前の出来事だが、その話を聞いたとき、僕は、遠い昔の出来事として聞き流すことが出来なかった。水がなければおいしい米は作れない。米どころか生きるもの全ての生命さえ危うくなる。争いになるほど大切な水なのに、僕たち人間は大切にしてきたのだろうか。

地球温暖化が話題になってから、結構な歳月が流れている。しかし、地球温暖化を何とか食い止めようと訴えている一方で、僕たちの暮らしはどんどん便利になり、物が溢れ、ゴミを増やしているような気がしてならない。地球温暖化が僕たちの生活にどんな影響を及ぼしているのか、今一度真剣に考える必要があると思う。

水は、この地球上になくてはならない大切な物である。遠い昔の「水戦争」が二度と起こらないように、そしてこの大切な水を僕たちの次の世代、その次の世代へと残していくために、自分の生活をもう一度見直したい。

今日も僕はスクールバスの窓から川を眺める。どうか、この川の流れがいつまでも枯れることがないようにと願いながら。

入選

「水の豊かさ」を築く

岩手県 盛岡市立飯岡中学校
三年 大湊 英 恵

「鹿妻の堰の淀みなき／清き流れを引き入れて／長田を畑をうるおせる」飯岡中学校の校歌には、こんな歌詞がある。その歌詞の通り、校舎の側には鹿妻堰が流れ、その濁りない水がのどかな田園風景をつくり出している。四季折々で変化する稲の姿は、私に小さな楽しみを与えてくれる。春にはまだ不安げに立っていた苗が、夏が来ると土の色が見えなくなるほどに成長する。秋に稲穂が揺れる姿は、まるで大きな鳥の影かと思うほどだ。

盛岡は今でこそ水の豊かな土地だが、実は四百年前はひどい荒地地だった。やせた土地に強い作物を育てても、水は足りない。米を作るのは大変難しい状況だった。そこでこの土地を治めていた南部家は、新しい用水路を作り、稲作を行おうと決心した。鉱山師の鎌津田甚六が呼び寄せられ、たくさんの人々が協力した。取水口は岩を削って作るため、膨大な時間がかかる。もちろん機械などはないので、人の手で削らなければならない。洪水で作業が中止になったこともあった。それでも人々が諦めなかったのは、「水が欲しい。」という強い願いがあったからだろう。その思いを持って切磋琢磨した末、やっと鹿妻堰が完成。人々はどんなに喜んだことだろう。もう水をめぐって争うこともない。米だけではなく、他の作物も作れるかもしれない。水が、人々に豊かな実りと安定した生活、心の平安をもたらしたのだ。水は、本当に素晴らしい力を持っている。

盛岡は荒地地から、水の豊かな土地へと生まれ変わった。全国から見ても、断水などは滅多にないし、ダムの水が枯れたという話もあまり耳にしない。これも先祖たちの大きな努力のおかげである。しかし私たちは、その努力に応えられているだろうか。

私が通う中学校では、給食を食べた後に歯磨きをする。その様子を見ていると、「水の豊かさ」への疑問がわいてくる。例えば、必要でもないのに、水を出しつつ放しにする人、また歯磨き粉を洗面台に落とすと、蛇口をめいっばい開

て洗い流そうとする人もいる。

確かに蛇口を閉めたままの人や、汚れは少ない水で洗い落とそうとする人もいる。それでも、「水はあっても、水を大切に思う心はあるのだろうか？」という疑問はぬぐえない。それに、私の身の回りだけでなく、日本にはこんな問題もある。人間が水を得るとき、雨や雪の存在は欠かせない。日本の年間降水量は約一七〇〇〜一八〇〇ミリほどで、世界各国の平均と比べると約二倍である。しかし、人口一人当たりの降水量は約五〇〇〇〜五五〇〇立方メートル。これは世界平均の五分の一程度なのだ。更に、国土が南北に細長いため、地域によって降水量に差がある。渇水が起こる地域も少なくはない。日本全土が必ずしも水に恵まれているわけではないのだ。

私たちがどんな水を使う一方で、それがなくて困っている人たちもいる。その人たちを、私たちは見ないふりをしていいのだろうか。先祖たちは、水がない環境にあったからこそ、その大切さに気付き、鹿妻堰を作った。「遠い場所の水不足なんて関係ない。」と言うのは、今持っている豊かさを否定することでもあるのだ。

水に恵まれた私たちが、水を大切に使う。そのことで、水不足を解決する道がひらけてくるのではないだろうか。シャワーを使う時間を一秒ずつでも減らしていく。歯磨きの時には蛇口をしめる。そのように少しの水でも大切に思う心が、本当の豊かさへの導きになるのだ。

飯岡中学校の校歌には、「実り豊けし我が郷土」という歌詞もある。その歌詞を守っていけるか。それは私たちににかかっている。

入選

命の源―水

山形県 米沢市立第二中学校

三年 王

凱

あなたは水について考えたことがありますか。あれは何年も前のことだった。ある日、たまたま立ち寄った本屋さんで僕は水に関する本を見つけた。開いて見ると、そこには驚くべきことが書かれてあった。

「地球上にあるすべての水をバケツ一杯にすると、飲み水はそのうちのたったの一滴である。」と。毎日普通のように飲んできた水、それが僕たちにとって、こんな大切なものだったとは：・当時の僕の素直な感想だった。

僕の故郷中国では、水道水はそのまま飲むことができない。沸騰させないで飲むとお腹が壊れるからだ。さらにひどい所ではミネラルウォーターを生活用水として飲む人もいる。一リットル三元(約七十五円)のミネラルウォーター。清潔な水を普段飲んでいる僕たちにとってはなくてもいいようなものだが、それはそこに住む人々にとっての命の源だ。

僕は小学五年生の時に親の都合で初めて来日した。日本に来て、まず驚いたことが二つあった。水道水がそのまま飲むこと、そしてそれを「おいしい」と感じたことの二つだ。小さい頃から水道水をそのまま飲んだことがなかった僕にとって、それは今までの常識を百八十度ひっくり返したような出来事だった。

きれいな水を普段から飲むことはとても幸せなことだと思う。今こうして生きている間も、地球上には新鮮な水を飲めずに困っている人々が十一億人もいる。その人たちに対して僕たちに何かできることはないのだろうか。僕は思った。そして、それは僕が水のこと初めて興味を持つ瞬間でもあった。

みんなの知っているように、人間は強い生命力を持っている。食料なしでも四十日間ぐらいは生きられる。しかし水なしでは二週間ほどしか生きられない。水は人間の命の源だ。

しかし、先ほども言ったように、地球上には多くの人々が新鮮な水を飲めずに困っている。先進国の飲水率が百パーセント近くに対して、ある国では十三

パーセントしかない。つまり、その国のほとんどの人が水を飲めずに困っているのだ。また、水は飲めても、その水に含まれる有毒物が危険なレベルに達している場合も少なくない。つまり、このほかにも水質の差などの問題も生じているのだ。

では、僕たちにできることはないのか。それにはまず水の循環を理解しなければならぬ。水は主に水蒸気の気体、川や海の液体、そして氷の固体と三つの状態に分けることができる。状態変化により三つの状態が生まれることで、僕たちの身のまわりのいたるところに水が存在できるのだ。地上の水が蒸発して雲となり、雨となって降ってくる。しかし、大気汚染によりその地点で水が汚染される。また、たとえ空気がきれいだとしても、地上に降って来た雨が生活ゴミや産業廃棄物によって汚されれば、それはきれいな水だとは言えない。つまり、環境問題が改善されなければ、水質問題は改善されない、逆に水質問題が改善されれば、新鮮な水を飲める確率は大きくなるのだ。

今、僕たちにできることは身の回りにたくさんある。食べ残しをしない、油を拭き取ってから食器を洗う、洗剤を少なめに使うなどと、たくさんあるのだ。自分で見つけて、今日から実行しよう！

水は人間の命の源だ。水なしでは絶対に生き延びることができない。そんな大切な水をいつまでもこの水の惑星―地球に残していこう。我々の子孫、そしてこの地球のために。

入選

私が考える水質再生計画

福島県 郡山市立緑ヶ丘中学校

二年 増子光希

私の住む福島県には湖水面積全国四位の猪苗代湖がある。私は、この湖を眺めるのが好きである。ゆっくりと波が返す湖は穏やかでも澄んで見える。しかし、最近の猪苗代湖の水質は悪化している。以前は水質日本一であった湖は、大腸菌群の発生によってランク外の基準にまで達してしまった。この事を多くの人が心配し様々な活動を行っている。私もよく、その湖岸清掃活動に参加している。しかし、猪苗代湖には毎日多くの観光客が訪れるせいか、ゴミがなくなることはない。また、湖水の水質悪化は猪苗代湖周辺の観光ホテルなどの生活排水が湖水内に流入してしまった事が一つの原因ではないかと言われている。下水道整備が進んでいないが、このままで良いのだろうか。みんなの意識が水を大切に思い環境改善しなくてはならないという方向に導くにはどうしたらいいのだろうか。

私は、中学一年の郷土を知る総合学習で県中浄化センターを訪問し水環境改善について学習した。生活排水などで汚れた水を微生物を使って汚泥を沈ませ、きれいな水に改善している事に驚いた。そして、その工程には莫大な費用と時間がかかっている事も知った。私達はもっと生活の中で水に負担をかけるまいかと心掛けなくてはならないと感じた。その実践として、ヤシノミ洗剤を使って食器洗いしてみたが、いつもの洗剤と違い、泡立ちが少なく汚れが落ちている実感がなかった。

「この洗剤って何が違うの。」と、私は母に聞いてみた。

「植物原料だから手肌に優しいだけでなく、地球にも優しい洗剤で、使用した排水は微生物によって生分解されてすばやく地球に還る洗剤なのよ。」と教えてくれた。

私はその時、洗剤にも色々な種類がある事を知った。私達の生活用品は、人間が便利に生活する事を優先させて作られているものが多い。それに疑問を感じないで生活していたが、水循環の学習で浄水に負担をかける生活がで

いかと考えている。

母は、台所の排水口に古いストッキングを使用している。「こうすると、食器を洗った時に出る小さな残りかすが取れるから、下水を少しでも汚さないのではと思って。」と母は、言った。

このような小さな事でも、行動を起こす事が大切ではないだろうか。私達が、私達それぞれの家庭の水の使い方や排水の汚染を少しでも気にかける事によって、私達の地球の大切な資源である水を守る事に繋がっていくと思う。

私は、多くの先人が築き上げた安積疎水の水源である猪苗代湖に感謝し、恩返しをする活動をみんなの力で実行できればと思っている。その為に、学校単位など私達中心の清掃活動や生態系を学習する機会を作る事は出来ないだろうか。私達を巻き込んだ猪苗代湖の環境改善活動を行う事で、猪苗代湖に愛着を感じ、守っていかなくてはならないという意識が自然に起こってくるはずだと私は思う。私達が学び伝えていく事で、家庭での生活排水の環境問題意識も変わっていくと思う。

みんなの力で、猪苗代湖の周辺をきれいにする事で、観光する人達も汚してはいけないという気持ちを持ってくれるに違いない。そうして、水を守る気持ちが高まって行けば、必ず猪苗代湖の水質が改善され、猪苗代湖が水質日本一に戻る日が来ると思う。

猪苗代湖の水環境再生は、私達がかぎを握っているのではないだろうか。

これからは、環境問題を常に意識して、未来へ続く地球の大切な水を私達が守っていききたい。

入選

命を支える水のバトン

茨城県 水戸市立第五中学校
一年 合志 由樹

僕が学校から帰って来ると、家の前の道路で工事をしていた。工事のおじさん達に挨拶をして家に入ると、家には誰も居なかった。僕は、手を洗おうと水道の蛇口をひねった。ボンと音がはじけて、水が出て来た。おかしい。それでも、その水で手を洗って、タオルで手をふいた。白いはずのタオルが茶色になっていた。ギョツとした。故障かなと思ひ、家中の蛇口をひねってみると、ゴボゴボツという音と共に、にごった水が出て来た。(しまった。家の前の工事は、水道管を直していたんだ。水を出しちやだめなのか。)僕は、あわてて水を止めた。二時間ほど待って、緊張しながら水を出してみると、初め茶色かった水が、徐々に透明になっていった。しばらく水を出した後、少し飲んでみる。大丈夫。僕は、ほっとした。蛇口から出る水がこのままにごっていたら、わざわざ水を買に行ったり、もらいに行ったりしなければならぬと、僕は心配でならなかったのだ。

蛇口をひねれば、きれいな水がいくらでも出て来る。それが僕にとって、当然の事だった。僕は風呂場では、当たり前前に、シャワーでじゃんじゃんお湯を使っていたし、庭に水をまく時は、いつの間にか遊びになっていて、そこら中に、ホースから出た水をまき散らして、虹を作っていた。たまに、水のありがたさを感じる時といえは、走った後に冷たい水を飲む時か、キャンプで重い水の入ったポリタンクを運ぶ時くらいだった。それなのに、たかが数時間水が飲めないと思っただけで、僕はあんなにもドキドキして不安になってしまったのだ。

水が使えるのは、県や水戸市のおかげだ。楮川ダムや浄水場にだって霞ヶ浦導水にだって見学に行ったことがある。水道料金が、水道管の工事をしたり、水を作るために必要な設備を作ったりするのに使われている事だ。って学習した。しかし、今回ほど、水のありがたさを感じた事は無かった。

僕は、小学生の時に浄水場見学でもらった冊子をひっぱり出して読んでみる

事にした。大昔の人々は、水を探し、水場の側で暮らしていたが、時代が進むと、水の側に住むのではなく、住居の側に水を引いてくる工夫をした。近代になり、ふく流水を利用した水道のしくみが生まれ、今では、那珂川の水を浄水場に送ってる過し、消毒して水道水を作っているという歴史が書いてあった。これを読んで僕は、僕たちの時代までに、多くの昔の人達が、知恵を絞って、安全な水を送り届けてくれたのだなと思えてきた。

それでは、僕たちは、未来の人達の為に何をしなければいいのだろうか。一つには、もっと水をきれいにいしくする技術の開発。それから、もし、災害がおこり水道が止まったとしてもパニックにならないようなしくみを整えたり、水を、海水や空気中から取り出すなど、別の方法で手に入る技術の開発も必要だ。しかし、もっと大切なのは、今ある川の水をきれいなまま未来へ残すことだ。一人一人が、水を守ろうとする気持ちを強くもち続けて、ゴミを捨てたり、汚れた水を流したりしないようにしなければならないと思う。

今、僕の目の前の水そうの中で、カメが元気に泳いでいる。兄が水を替えたばかりなので、盛んに口をパクパクさせている。世話をしている兄の話によれば、カメは水そうの水を飲むので、汚い水で飼われているカメは、水を飲めずに脱水症状で死ぬ事もあるそうだ。地球上の汚れた水が、水そうのようにまるごと取り替えられたらいいのだから、それは無理だ。水の質が命にかかわるという事は、カメも人間も同じだと思う。

常に水に感謝し、未来へ安全な水を絶やさず送り届ける気持ちを持ち続けた。小さな努力でも、皆で続けていく事が大切だと思う。

入選

水—命の源—

茨城県 茨城県立並木中等教育学校

二年 石井 萌加

水面に映るかわらぶきの屋根の家、木々、そして山……。スーッと心地よい春風が吹くたび、ゆらゆらと水面の景色が揺れ、太陽の光が様々に反射する。キラキラと輝く水面は、本当に美しい。水の張られた田んぼに映る風景は、まるでもう一つの世界が誕生したかのように見えてくる。私が生まれ育った茨城県筑西市では、四月下旬頃、あちらこちらでこんな美しい景色が広がっている。いなかならでは、この水と光の世界は、私の大好きな風景の一つだ。

特に、我が家のすぐ東側が田んぼだったせいだろうか。太陽、筑波山、そして田んぼが一セットで、四季折々の姿を見せてくれていた。また、家の出入り口付近に水路のポンプがあったので、水路を流れる水の音は、幼い頃から日常のものとして聞いていたと思う。早朝、ポンプのハンドルが回される。と同時に勢いよく水が流れ出す。ドドーンという響きは、朝の寝ぼけた体も目覚めてしまうような力強さがある。そして、こんなに勢いよく流れていく水が、それぞれ田んぼへと運ばれていくのを知って、米作りには水が欠かせないということを感じてきた。

では、米作りのために水はどれだけ必要なのだろうか。調べてみると、稲は約百日間、深さ五センチメートルに水を張った水田で栽培され、一ヘクタールあたり約二万トンの水がかんがい用水として必要なのだそうだ。実際には、大部分の水が流れ下ったり、土にしみこんだりしてリサイクルされているのと、こどだが、ご飯茶碗一杯分の米を作るのには、約六百八十リットルもの水が使われる計算になるという。(「来て！見て！学ぼう！霞ヶ浦」より) 私たち日本人は、長いこと米を主食として生活してきたが、そこには豊富な水が存在していたからだと確認することができた。当たり前のように食べているご飯ではあるが、お米を育ててくれた水へのありがたさを忘れてはならないのだ。

しかし、現代の日本において、私たちはどれほど水について真剣に考えているだろうか。水道のじゃ口をひねると絶えることなく流れてくるし、レストラ

ンでは、テーブルに座っただけで冷たい水が運ばれてくる。いつしか、私たちの中に「水は無料だ。」というような錯覚が生じてしまっているのだから、飲み残しの水を何の罪悪感もなしに流しに捨ててしまう。顔を洗う時も必要以上に水を勢いよく出したままにしている。髪の毛を洗っている時も、つい水を流したままでシャンプーを付けていることが多い。時々、真夏になって雨不足が報じられ、ダム貯水量が減り、取水制限のニュースを耳にすることがある。しかし、幸いにも私が生まれてから自分の住んでいる地域では、そのような経験がなかったもので、どこか、他人事のように感じてきた。

私たちの住む日本が、水に恵まれた気候、土地であることを知ったのは、ここ二、三年のことである。一方で、世界には水が不足している国々がたくさんあることを本で知った。

汚れた水を飲んだことで伝染病にかかり、多くの子どもがなくなっている。また、家の近くに井戸がないため、数キロメートルの道のりを、一日に何往復もしなければならぬ私と同年代の子どもたちもいる。わずかな量の水も無駄にせず大切に使用している国々の生活を思うと、もう一度、水の貴重さについて考え直さなければならぬと強く思った。それが、今を生きる私たちの使命ではないだろうか。

五月。田んぼではあちらこちらで田植えが始まった。かわいらしい稲の苗の根元に、タニシを見つけた。ゲロゲロとカエルが鳴き出した。元気で、にぎやかなカエルの声は、生命力の合唱のようだ。すべての生物の命を育んできた水の存在がいとおしく感じられる。命の源、水を大切にしていきたい。

入選

「水と地球のためにできること」

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校

二年 吉岡海輝

「水を大切に使う。」

普段から聞きなれた言葉であって、それなりに理解しているつもりだった。水と緑が豊富な群馬県に生まれ育った僕にとつて、水は空気と同じように無くてはならない存在。蛇口をひねればいつでも得られることが当たり前で、その尊さに感謝することはあまりなかった気がする。

昨年の冬休みを利用して、海運会社に勤める父が担当した、最新鋭の大型コンテナ船に便乗した。イギリスからシンガポールまで、北大西洋↓地中海↓スエズ運河↓紅海↓インド洋の合計六カ国の港を巡り、異文化交流と洋上生活の機会に恵まれた。

当然のことだが、洋上を航海する船では真水の補給は出来ない。そこで船内では、海水から淡水化装置を使って真水を作り出すことが行われ、乗組員の生活と船の運航を支えていた。そのお陰で、海の上でも蛇口をひねれば、自宅と同じようにいつでもキレイな水を得ることができた。しかし、その保有水量には制限があつて、二十五名の乗組員全員が一滴の水も無駄にしない努力と工夫をしている姿に驚かされた。船内のあらゆるところに地球型のエコマークがはられ、常に全ての蛇口は絞られていた。お風呂や洗濯の使用も制限される時もある。トイレは、飛行機と同じ少ない水量で流れる仕組みだった。また、船内から排出される生活用の水や、エンジンなどの機械を動かすために使用される水を全て浄化装置でキレイにし、海に返していた。それまで、水を大切に使うことの本当の意味を理解していなかった自分が恥ずかしい気持ちになった。

「水がなくなったらどうしよう…生きていけない。」と、初めて考えた。

「砂漠の中を通るスエズ運河の近くでも、緑があつて、作物が育つのはナイル川のお陰だよ。」と、船長さんが話してくれた。文明の起源には必ず大河があることを思い出した。また、文化の異なる世界を体験することで、改めて日本が安心して水を使うことができる恵まれた国であることも感じた。

もともと自然界では、海から発生した水蒸気が雨雲となり、地上へ雨として降り注ぎ、それを森の木々や土壌が浄化し、僕たちの生活に欠かすことのできない貴重な水となつて供給されている。そして、この地球上の生命の源は、約四十億年の昔、地球の三分の二を占める海から誕生し、度重なる進化を経て今日に至っている。見渡す限りの水平線や、常にその表情を変えていく海と、そこに流れ込む河川の風景から、僕たち人間は、海から与えられた水を生きる糧として活用し、再び海に返しているということを、大海原の中で実感することが出来た。

しかし、過去に人間は、産業の発展に伴つて大量の廃棄物や有害物質の排出により河川や海を汚染し、そこに住む生物や人々の暮らしに多くの被害を与えてきた。その後、環境保護や地球温暖化防止に関する条約が、世界各国地球規模で考えられ、水を大切に使うことだけでなく、使った水をキレイな状態で海に返し、再び自然の恵みを受けることがとても重要だと言われるようになっていく。

一滴の汚れた水は、川を汚すだけでなく海まで流れ、多くの生命や自然環境へ大きな影響を与える。それはまるで、人の体の三分の二を占める体内の水が汚れ、体調を崩して病気になるのと同じことだと思う。

僕たち人間は、水を大切に使うことを通して、母なる海を守ることを知り、いつまでもこの地球が瑞々しく美しい星でいられるよう、一滴の水の重みと、一滴の汚れた水が地球に与える影響を常に考え、行動しなければならぬ。

入選

節水、できるところから始めよう

千葉県 松戸市立第五中学校

三年 吉次 由美子

新聞のページをめくると、「きれいな水をください」という見出しと共に、うつらな目をした子供が、じつとこちらを見ている写真が私の目に飛び込んできた。

子供ではどうすることもできない無力感を私に訴えかけているような表情は、強烈な印象として、私の心に残った。

このユニセフが行った意見広告の紙面は、「世界では、未だに安全な飲み水が手に入らず、汚れた水しか飲めない子供たちが四億人以上いる」ことや、「汚れた水と不衛生な環境が原因で下痢性の疾患にかかり、毎年百五十万人もの子供の命が奪われている」ことを私に伝えてくれた。

また、「汚れた水が原因で病気になり、学校を休まなければならず、子供たちの教育の機会が奪われるなど、成長にも大きな影響を与えている」こともわかった。

ユニセフでは、このような水の問題を解決するために、井戸の設置や衛生施設の改善に取り組んではいるが、未だ問題解決の兆しは見えていない。安全な水を広く供給するということは、一朝一夕にはいかないのだ。

翻って、私たちが暮らす日本の社会はどうだろうか。子供でも蛇口をひねればいつでもきれいで安全な水が、好きなかだけ出てくる。このことを誰も疑う余地がない程、私たちの社会では水の利用環境は整い、安全な水の供給システムは休む間もなく機能している。

しかし、昨年私が地球と他の惑星の違いについて調べていた時、「水の惑星」といわれる地球も、近年、深刻な水不足という事態に陥っていることを知った。

「水の惑星で水不足？」こんな冗談のように聞こえてしまう状態を招く理由は何だろう。世界の水の事情を調べてみると、砂漠などの地域の国は水資源が乏しく、熱帯雨林などは極端に多いなど、水資源の偏りが挙げられる。

また、日本でも、河川の水量の多い時の水を少ない時に利用することができ

ない。その他、水の供給システムが構築されていない国もあるなど、水の惑星といわれる地球の水も、決して公平に配分されている訳ではないのだ。

では、私が住んでいる千葉県の水資源の状況はどうだろうか。千葉県は三方を海に囲まれ、その海岸線の長さは、五百キロメートル以上にもおよぶ。そのせいか、水資源は豊かであると、私は思い込んでいた。

しかし、調べていくと、千葉県はむしろ、水資源の確保に苦労していることがわかった。六百万人もの人々が暮らす千葉県。この千葉県の主な水源は、利根川と江戸川だが、千葉県の規模を考えると、これらの水源では十分とはいえないのが現状だ。

川から取水し、二百三項目にも及ぶ水質検査や工程を経て浄化される私たち千葉の水。きれいで安全な水は、その後、地域の浄水場から各家庭に配水される。私たちの生活に、直接影響を及ぼす「命の水」を安定して供給することは、そう簡単なことではない。

しかし、毎日利用している私たちは、そのことを理解して、水を大切に使用しているだろうか。もしも、このままの状況で消費していると、いずれは水不足を招き、ダムの水も枯渇してしまう時がくるのだろうか。

私は今まで、日常の暮らしの中でも節水を心掛けてきたが、この調べを通して、その思いが、より一層強くなった。だが、日々の生活の中で節水を意識することは、容易なことではない。だからこそ、例え一滴でもわずかなものと思わず、日常の暮らしの中で節水に努めるように心掛けることが一番大切なことだと、私は思う。

また、各家庭で積極的に雨水などを利用し、プランターや植木の水遣り、夏の「打ち水」に使えばいい。節水は意識すれば必ずできる。さあ、できるところから始めよう。

入選

わたしたちと水

東京都 桐朋女子中学校
二年 千葉 明 美

夏の暑い日、ハンドボールの練習を終えて、水道の水を頭からかぶると、ほんとうに気持ちがよく、生き返ったような気がします。

「水を大切にしよう！」と叫ばれています。でも、正直なところ、あまりピンときませんでした。水道の蛇口をひねれば、勢いよく水が出てきます。私は、実際に水不足で困ったり、悩んだ経験がないからかもしかかもしれません。私には、水が必要なときには、蛇口をまわすだけでいくらかでも水が出てくるのが当たり前だと思っていたからです。

しかし、ある日テレビでユーラシア大陸のアラル海という内陸湖の様子を科学者が説明する番組がありました。五年前と現在の二枚の航空写真が紹介されていました。驚くべきことに、たった五年ほどで湖の三分の一が消失し、砂漠化してしまつたようですが、くつきりと示されていました。

これは自然現象ではなく、人間の水に対する姿勢が招いた結果なのだそうです。このままでは、十年、二十年後には確実に、この湖はなくなつてしまうだろうと科学者は予言していました。

その後、夏休みに、私はアメリカ合衆国カリフォルニアに旅行したときに見た光景が強く心に残っています。

カリフォルニア州は、陸続きで隣国のメキシコと接しています。陸路、メキシコに向かったときのことです。ハイウェイの両側には、青々した大農園がずつと広がっていました。オレンジや小麦などが栽培されているのだそうです。でも、ガイドさんの説明の「これらの作物は、いわば石油によって栽培されています。」という言葉が印象的でした。この青々した作物も、農場のあちこちに設置されたスプリンクラーからまかれる水によって成長しているのだそうです。そして、その水を地下からくみ上げたり、スプリンクラーを動作させるエネルギーとしての電力は、石油から発電されているわけで、結局、石油に育てられた作物だということです。

そうした説明を聞きながら、メキシコとの国境で一度、車を降りて、徒歩で国境を越え、メキシコのバスに乗り換えました。すると、道路の両側の風景が一変したのです。アメリカ側は緑豊かな大農場が広がっていたのに、メキシコでは、砂地が中心で、カリフォルニアのような豊かな緑は見あたりません。ところどころにサボテンが見られる程度で、ほぼ砂漠に近い印象でした。地続きでつながっている両国ですが、水があるかどうかで、こんなにも違うことを自分の目で見て、どんなに水が大切かがわかつた気がしました。

水資源が豊かだといわれる日本に比べると、あまり水の大切さを意識することもないのですが、テレビで見たアラル海の急激な変化や、実際に訪れたメキシコのようなことから、私たちは、地球規模で水の問題も考えていかなければいけないと思いました。

地球は「水の惑星」といわれます。でも、その水も無尽蔵なものではなく、私たち一人ひとりが、水を大切に使用することを心がけることが、地球上の全生物に欠かすことのできない水を、未来にわたつて残していくことにつながります。

私たちの日々の生活において、みんなが、ちよつとずつ節水を心がけるといふような、小さなことの積み重ねが、長い年月の間には大きな成果となつてくるはずですよ。

この美しい地球を守るため、私たちは、水を大切にすることを送りたいものです。

入選

「母なる海との誓い」

新潟県 新潟市立早通中学校
一年 長瀨 愛香

「誰だ！水出しっぱなしにしてるの！」

これを聞いて「ドキッ」としたあなたは、きっとお母さんに注意されたことがありますね。実は、私達のお母さんは人間のお母さんの他に、もう一人いるのです。それは「海」です。人間をはじめとする生物は、ずっと昔に海から生まれたと考えられています。その母なる海も人間のことをとつても怒っているのです。それは「人間が海を汚していること」。悪いことをした子供をお母さんが叱る様に、母なる海も私達人間を叱ろうとしています。

地球は、水の惑星と言われています。だから、水なんて沢山あるはずじゃないか！と、思いますよね。そう、今うなずいたあなた、でも実は、大間違いなんです。

現在、地球上では多くの国々で海が汚れていると聞きました。日本も、例外ではありません。水の汚染は、私達の毎日の生活排水、工業排水、農薬、ゴミ処理場などが主原因と言われています。自分の体や服、食器、車等を綺麗にしたその後の排水の行方をあなたは考えた事がありますか。洗剤を沢山使った方が確かに洗う物は綺麗になります。しかし、その一方で河川や海はますます汚染されてしまっているのです。汚染によって魚や動物の体にも異変が現れてきています。食物連鎖により現在それを食料としている人間の体内にも何らかの異変が生じてきているかもしれません。「自然を壊した人間達にはいつか自然の怒りが降りかかってくる」。母なる海は私達にこの事を伝えようとしているのです。

今、私達はこの地球の為に何をしたらいいのでしょうか。合成洗剤を使用しない、汚れを拭き取ってから食器を洗う、河川や海にゴミのポイ捨てはしない。私達にできることは沢山あります。水は、地球上のあらゆる生物の源であり、自然の力によって循環する資源なので、毎日の生活を見直すべきです。この様な「親孝行」を続けていけば、母なる海も喜んでくれるでしょう。

地球上における水の割合は七十パーセントです。その内、九十パーセント以上が海水で淡水はわずか三パーセントにすぎないのです。さらにそのほとんどが氷河や氷山として存在しているため、水の惑星と言われながらも、実は水源には限りがあるのです。私達は、それを知っておかなければなりません。

「蛇口をひねればいつでも水が出てくる」。日本に住む私達はこれが当たり前だと思いがちです。ケニアのある村では夏になると、水がすべて干あがってしまいます。そこで炎天下の中、女性や子供達が片道四十分かけて水源場まで行き、五〜二十リットルの水を背中に担ぎ、さらに四十分歩いて家まで運んでいます。毎日数回水をくみに行くそうです。その水は二〜三メートル程川底を掘った所からしみ出てくる水なので茶色く濁り、決して綺麗な水ではありません。村人達は、その水を使って食事を作り、歯を磨いているのです。

水不足の為に不作で子供達の給食もありません。昼食は茶色く濁っている水を過し、皆で数口ずつ回し飲みをして空腹を満たします。だから一滴も無駄にはできません。

くんできた水のわずかな残り、三日に一度だけ体を洗い流す子供達。その姿を目の当たりにした私は申し訳ない気持ちでいっぱいになり、涙が出てきてテレビ画面を見る事ができなくなっていました。その夜、私はシャワーを使いませんでした。歯を磨いている間、蛇口を閉めました。買ってきた水を飲みません。洗濯水はお風呂の水を使うように、母に頼みました。そして、当たり前前に水が出る有り難さに、心から感謝しました。

母なる海へ……私はあなたの願い通り地球環境について考え、水を汚すことなく、限りある水源を、そして母なる海を守り、海と生物（母と子供）が安全に暮らせる地球（家）を大切にしていく事をここに誓います。

入選

水と私達の未来

福井県 福井市立足羽中学校

三年 小原 あい

私の住む福井市には、足羽川、九頭竜川、日野川という三つの川が流れており、豊かな水源に恵まれた美しい環境にあります。そのため、蛇口をひねればすぐにおいしい水を飲むことができます。私はこうした環境にいられることを幸せに感じています。

しかし、同じ日本であつても全く違う環境があるのです。東京や大阪、京都などの都会では水道水がおいしくないと聞きます。生活していく中では特に問題はありますが、飲料水として使用する水はスーパーマーケットで買う人が多いそうです。福井で生活する私にとって、水を買うという事はまずありません。水は消臭臭くないし、濁ってもいけないからです。水道水をおいしく飲めるということは私達にとってはあたりまえのことだけど、とっても幸せなことなんだなと思いました。

先日姉から、オーストラリアでホームステイしていたときの話を聞き、驚いたことがあります。姉がホームステイしていたのはメルボルン市で大きな美しい川、たくさん動物が生息する大自然に恵まれた所でした。ところが、ホームステイ先の人達は決して水道水を飲むことがなく、ペットボトルに入った水をスーパーで買っていたそうです。「水道水を飲むではいけないよ、お腹が痛くなるから」と言われて姉はびっくりしたそうです。冷蔵庫の中は、いつもミルクや炭酸飲料、ジュースなどであふれかえっており、それらと混じってペットボトルにはいった水があることが不思議に感じられたそうです。また、シャワーは五分以内と決められており、決して水の無駄使いは許されなかったそうです。

世界の国々には水に恵まれない地域がたくさんあると聞きます。アジア、アフリカなどの地域では、水が不足しており、いくら必要であつても水を満足に使うことはできません。それが原因で亡くなってしまいう人が十億人を超えています。また、他の地域では水質汚染により病気になってしまった子どもたちが

次々と亡くなっているのです。このような立場の人達から見たら、私達はどれほど幸せなのでしょう。だれもが同じように水を使えるわけではないということが世界の現状なのです。

水を自由に満足して使えること。それはとても幸せなことです。しかし、水が自由に使えるからといって後先何も考えずに使つてはいけません。他の地域のこと、未来のこと、そしてこのきれいでおいしい水をこれからも守っていくにはどうしたらいいかをよく考えて使っていくべきです。

私達一人ひとりが行える小さな対策から考えていくべきだと思います。お風呂の残り湯や雨水を再利用することや、水をこまめにため無駄にしないこと。また、水ができる限り洗剤や油などで汚さないようにすることなど。私達一人一人が実行していくことで少しずつ未来の水を守っていくことにつながっていくと思います。

日本は世界に比べて、水に関する苦労は少ないと思います。しかし、蛇口をひねると泥水が出てくる国もあるそうです。水に関する苦労のない生活をあたりまえと思わずに、水がなくなってしまうたら、どのような生活を送るようになってしまうのか、よく考えて、水という自然から生まれた資源の大切さを深く理解していかなければならないと思いました。

私は、いつまでも日本が水に恵まれた国であつてほしいと思います。そのために私達にできる対策を一つ一つ実行していこうと思います。

入選

恵みの水

静岡県 聖心女子学院不二聖心女子学院中学校

一年 山下梨那

「うっ。何これ？」

私はいきなり、口にした水を吐き出した。

春休みに、単身赴任でフランスに住む父に会いに行った時のことであつた。父の住む家に着いて、私は何も考えずに台所の蛇口から水を飲んだ。いつもと違う違和感のある味にびっくりした。普通の水だが普通ではないのだ。今までこんなに水の味に反応したことはなかった。静岡県三島市に住んでいる私にとって、蛇口をひねるとおいしい水が出てくるのは当然のことであつた。私はあわてて父に聞いてみた。

「この水、何？」

すると、「あ、この水道水は日本人にとってはかなり葉臭いかもしれないね。フランスは日本と違って、水に石灰分が多く含まれているんだよ。飲み水としては使えないから、買ってあるペットボトルの水を飲むといい。」と言われ、台所のすみに置かれた大量のペットボトルの水を見せられた。フランスにいる間、お茶やコーヒーを飲むにしても料理をするにしても、口にするものは全てペットボトルの水を使用した。そのようなこともあって、フランスにいるこの十日間は水を無駄に使わないよう努力した。それでも、私達家族四人がいかに大量の水を消費したことか・・・空になったペットボトルの山に驚いた。こんなに水を意識して使ったことが今までにあつたのだろうか。今回の経験で、今まで私が日本で使っていた水道水が、実は貴重な恵みの水であつたことに改めて気づかされた。

特に私の住む三島の水道水は、富士山に降った雨や雪が長い水脈を通り何十年もかかってやってきた湧き水で、とてもおいしい。小学校四年生の時、学校から浄水場見学に行った。その時、三島の水は地下水をそのまま飲んでも良いくらいきれいな水であると伺った。上水道として使用するために少しかだけ薬を入れていけるとのことだったが、この時は地下水を直接飲ませて頂いた。すごく

冷たくて甘みがあつておいしかったのを覚えている。

そもそも「おいしい水」とはどのような水をいうのだろうか。「おいしい水」の水質条件をパソコンで調べてみると、次のようなことが書かれていた。『まろやかな軟水でミネラル成分も適度に含まれ、水温は最適とされる十六度前後。PH値も中性の七・〇前後。水の味を損なう有機物の量も少ない』三島の水はその基準を十分満たしている。蛇口をひねると飲めるおいしい水。その水は私達に与えられた自然の恵みからのかけがえのない贈り物であつた。

しかしこの三島の水も、近年大きな変化が現れている。私は幼い頃よく楽寿園の小浜池や白滝公園、源兵衛川で水遊びをした。その水が年々減少している。今まで一年中流れていた水が、最近は初夏から秋の湧水期しか流れなくなっている所も多い。私が生まれるもつと昔、三島は「水の都」と言われ、昭和三十年代の前半まで、こんこんと湧き出る湧水によって、市内を流れる川はあふれんほどの豊かな流れを見せていたそうだ。それが今では、工業用水や生活用水の使用が増えた事、都市化の進展等により、「水の都」という風景を見る事が難しくなりつつある。

小学校の時、源兵衛川のごみ拾いに参加したことがある。その時は、何気なく参加したのだが、それが三島の自然環境再生活動の一環であり、「水の都」三島の原風景を取り戻そうとする人々の熱意に支えられた尊い活動であることを後になって知った。私達の暮らしの中でまだまだできることがあると実感し、うれしかった。三島の町が、ずっと後世まで「水の都」と言われ続けるよう、湧水復活の取り組みに積極的に関わっていくことが私の役目であると、今強く思う。